

広瀬 隆：心理療法場面における夢素材の利用（その1理論編）

—トラウマ論、アタッチメント理論、神経科学との接点をもつユング派のアプローチ—

[論文]

## 心理療法場面における夢素材の利用（その1理論編）

—トラウマ論、アタッチメント理論、神経科学との接点をもつユング派のアプローチ—

帝塚山学院大学人間科学部心理学科  
北大阪こころのスペース

広瀬 隆

How to Utilize Dream Materials in Psychotherapies (1. Theoretical Viewpoints)

— A Jungian Approach in Contact with Trauma Theories, Attachment Theories and Neuroscience —

HIROSE, Takashi

Keywords: Dreams, Jungian, Psychotherapy

### 1. はじめに

近年、いわゆる evidence-based が唱えられる中で、ユング心理学や精神分析療法は、認知行動療法や EMDR、その他実証的にその効果が証明される新たな技法によって駆逐されるのではないかという不安があった。力動的心理療法からすると、行動療法や神経科学は意識や無意識を奪い取る悪魔のように2000年代初頭の私には感じられたのである。しかし、その後、トラウマ論やアタッチメント理論、神経科学的なアプローチに触れるにつれ、そうした偏った見方は修正されることになった。ここに至るまでには多くの新たな見地との出会いがある。その1つとして、まず、van der Kolk のトラウマセンターでの虐待を受けた子どもたちへのアプローチから大きな影響を受けたことは間違いない。大著「トラウマティック・ストレス」の著者 van der Kolk は米国ボストンを拠点として極めて実践的な活動を展開している。神経科学的・身体的なアプローチを積極的に取り入れる

van der Kolk は、脳機能に注意を払い、トップダウンのアプローチだけではなくボトムアップのアプローチの重要性をも強調している。この見解からすると、下からの情動の襲来と上からの統制・制御をいかに統合されたものとするかが重要となる。トラウマセンターでは、身体や情動に働きかけるグループでの体験と同時に、それについて振り返り内省する機会を個人セラピーによってもつという。（この見解については、例えば van der Kolk 2006）この報告により、こころと体の結びつきについて改めて考えさせられた。

神経科学の知見を用いれば、こころと体の結びつきを包括的に視野におさめられるのは間違いない。現代の神経科学の中には、精神分析の潮流や既存の心理学的理論との照合の中で真実を浮かび上がらせようとする立場がある。かつて心因か外因か内因か、という原因論的な発想でとらえていた精神現象は、心/脳/身体という統合体における1つの現象ととらえられる。かつて構造的変化の有無を器質的問題とした時

代をこえ、特にイメージング技法の発達により、時々の機能や状態を相当描き出せるようになった。しかし、1人の人間に数千億とも言われるニューロンがあり、かつ1つの神経単位が1万以上のシナプス結合をもつ可能性を考えると、その働きを全てとらえるのは現在のところ不可能である。また、藤井(2009)によれば、脳の機能を人との交流場面でとりだすのは未だ難しく、2014年現在、近赤外分光分析法(fNIRS: functional near-infrared spectroscopy)」が唯一それに近い方法であるかと思われる。

心理療法場面における脳や身体の機能を測定するのは技術的には十分ではないにしても、そこでの精神活動もまた脳の機能と結びつけて考える必要がある。特に、認知の有り様だけではなく、情動生活の変容を問題とする我々心理療法家にとって、神経科学が情動を問題とし出したことに目をつむってはられない。現在の様子を記述するのに、Carter(2010)の言葉を借り著者なりに解釈すれば、主として認知的側面から機械的に脳機能をとらえようとした「脳の10年」が終わり、情動をもその対象とする「心の10年」が始まったと言うこともできよう。

近年、英語圏ではNeuropsychanalysis、Neuropsychotherapy、Neurocounselingと銘打った書籍が多数出版されている。日本では、著者の知る限り、心理臨床家向けの入門書として岡野(2006, 2013)をはじめとして数冊の書籍がある。また、心理療法家にとって役立ちそうな情動に関わる神経科学的見解として重要なAntonio R. Damasio、Joseph LeDoux、Alan HobsonやMark SolmsとTurnbul Oliverらの著作もいくらか翻訳されてはいる。しかし、実践的な心理療法の世界においては精神科医や臨床心理士はいたにしても、神経科学に精通した心理臨床家の数は限られているであろうし、本稿の著者も全て心理療法の実践家ではあるが、神経科学の学びにおいては駆け出しと言わざるをえない。心理療法の実践家でありつつ、

神経科学の大海から水をくみ上げるのは至難の業である。本稿は、サイコセラピストであり、かつ神経科学の有用性を深く認識しつつ、歩みを進めようとする1つの宣言の意味をもつものとさせて頂きたい。

発達論や関係論、神経科学の領域に関わると「本当にユング派なのですか」と尋ねられることがある。ユング派の中にも、こうした観点を取り入れている人達がいることを伝える役割を担うひとりとなればとも考えている。

なお、ユングが問題とした超常現象についても、ひと言申し添えておきたい。この問題は、生物化学的観点のみで解明することはできず、おそらくは量子論をはじめとした物理学との接点からも考える必要があるのではないだろうか。「あることはある、と言えるが、見つからないものをないとは言えない」というのが著者のスタンスである。ユング派としてSeele(soul)として描かれてきたものが脳の働きによる解明によって全て説明できるとは思えないし、そもそも脳や神経の働き自体がSeeleに劣ることなく未だ神秘なのであろう。しかし、少なくとも仕事としてクライアントと関わる時、トラウマ論・発達論、そして神経科学は避けては通れないと感じている。

なお、藤井(2009)によれば、「脳科学」という語は理化学研究所に「脳科学総合研究センター」Brain Science Instituteができた1997年に作られた用語だとのことであるが、近年brain scienceという用語を用いる向きもある。ここでは、脳内の神経に留まらず、より広い意味をもたせるために神経科学という名称を使うこととする。

## 2. ユング派における夢—夢素材は何を表すか、夢素材をどう取り扱うかという問題について

広瀬(1996)でも示したようにユングにとって影は、「全体性」(wholeness)を補完するも

のであった。しかし、早期関係トラウマを経験した人達は、Kalsched (1996) のいう「生き残りのセルフ」(survival self) のために、言わば影の側面を封印することによって生き延びることを優先する。そして、ユングの想定した「個性化」(individuation) は必ずしも目指されない。Kalsched のいう「セルフ-ケア システム」(self-care-system) による dissociation を用いたサバイバルが最優先されるのである。「二度と再び」をスローガンに、言わば電気のブレーカーを落とすかのように、肯定的な経験可能性も含め、出来事は経験から遮断される。

一方、ユングが取り組んだのは、個人的な影だけではなかった。キリスト教の文化の中で、キリスト教の影となっている悪や女性性をどう全体性に組み込むかは、個人的な出身家庭の問題であると同時に、西欧の社会的文化的問題でもあった。1953年に聖母マリアの神格がバチカンによって認められた時に、ユングがローマ教皇ピウス12世にその功績を認める手紙をしたためたエピソードは、ユングが三位一体をどう補完するかという課題に迫られていたことを裏付けるものであろう。一方で、セラピーの中での意識の一次的解体は、新たな再構築への契機とみなされがちであった。しかし、Fordham (1988) の言葉を借りて表現するなら、脱統合 deintegration は常に再生としての再統合 reintegration につながるばかりではなく、解体したままの状態である非統合 disintegration の危険をはらむものである。初期のユング心理学の中では「死と再生」が、直結するかのようにあまりにも安易に結びつけられる向きもあったのではないだろうか。

生物学の比喩を借りれば、自然にゆだねてアポトーシス (apoptosis) が起こるのを期待して待つようなものである。apoptosis は語源的には「apo- (離れて)」と「ptosis (下降)」に由来し、「(枯れ葉などが木から) 落ちる」という意味をもつ。イメージ的に理解すれば、オタマジャクシからカエルに変態する際に尻尾がな

くなるような変容のモチーフがあげられる。ユングの雨乞いの例え (Jung, CW 14) は、ユングのこうした側面を典型的に表しており、河合 (1992) のいう「全力をあげて何もしない」という言葉はこのことと関連づけられよう。しかし、黙って見ていると変容していくという姿勢が人生の全ての局面で適用できるとは思われない。北山 (1988) が提起したような子どもに対する「先取りと先送り」のような対応がクライアントにも求められると思われる。特に早期トラウマ、すなわち切り離すことで純粋な子ども時代の欲求を充足できず、解離し、それが出現することを脅威と見なすセルフ-ケア システムのような内的機制を問題とする時、Bromberg (2011) の言うような「安全だが安全すぎない」介入が必要となる。トラウマの反復は、まさにアポトーシスの考えを適用するに困難な事例なのである。受容や共感だけでは動きようのない経験の切断された事例、特に早期関係トラウマや反復的・累積的なトラウマの事例において、関係論やアタッチメント、メンタライゼーションが強調され、積極的なセラピーでの介入が検討されるようになったのは、故なきことではないと思われる。あるいは、積極的介入をすることの方が、むしろ「タオ Tao」の中にあると考えられる。

こうしたパラダイムシフトについて、Stein (2011) にならい、ユング派の世代という観点から考えてみよう。Stein は2010年あたりまでのユンギャンを5世代にわけて考えている。第1世代はユング心理学の成立の時代の分析心理学の立役者達の時代である。1913年にフロイトと決別したユングが、1914年に「国際精神分析学会」を脱退し、「夜の航海」の中で独自の立場の確立した時代をともした人達である。1948年に CG ユング研究所が設立され、訓練コースができあがる。当時の世代は第2世代で、生きたユングを知っていて、分析はユング自身と第1世代のユンギャンに受けた世代である。河合 (1966) が紹介している二人の分析家につい

たマルチプル・アナリシスの時代である。続く第3世代はユングを見たことがあるか、自分の第2世代の分析家はユングを知っている世代である。邦訳のある分析家として Mario Jacoby、James Hillman、Adolf Guggenbühl-Craig ら、そして河合隼雄もそこに位置づけられるだろう。第2世代の分析家の中には「ユングの本当に言いたかったことを私は理解している」「本当のユングとは」という発想をもち、わからないことがあると、「ユングに電話で聞く」というものがいた話が報告されている。(Stein, Jacoby, 2008) 河合の尽力により日本でユング心理学が一世を風靡したのは、第2～3世代が活躍している時期であり、創元社のユング心理学選書や人文書院のユングコレクションが発刊された。第3世代のユングの中にはユングが言ったことにしばられず独自の発想で動ける者も出てきた。河合もその一人であろうし、チューリヒの Jacoby (1984, 1985) は発達論・関係論をとりいれ、自己心理学とのブリッジの役割を果たした。今は惜しくも第3世代ユングが世を去りつつある時代である。第4～5世代以降、それぞれの始祖に縛られないあり方が展開されている。特に、トラウマ論、関係論、アタッチメント理論、神経科学との接点が広く認められる。

こうしたパラダイムシフトの中で、なおユング派であることの意味はどこにあるのであろうか。ユングの個性化概念はその最重要項目であることは間違いないが、それ以外にユング心理学の強調点としてイメージと情動があげられよう。古典的な精神分析の潮流とは異なり、ユングは解釈よりもむしろ、イメージや情動的世界そのものに留まり「拡充する amplify」ことを強調した。夢や箱庭療法、アクティブ・イマジネーションの展開はその例証であろう。しかし、一方で言語的な解釈の伝達はなしでもいいのか、あるいはセラピストの役割は何なのかと言った問題についても考えてみる必要がある。それについては脳機能との関連で後述する。

次にユングの問題としたコンプレックスと人格の統合性について、association と dissociation をキーワードとして考えてみよう。association は連想、dissociation は解離と訳されることがよくある。しかし、日本語に訳してしまうとこの2語が反対語である意味あい切り落とされてしまう。これは、container/contained にどういった訳語を当てるか逡巡したあげく、カタカナ語におさまったことを彷彿とさせる。何とつながり、何から離れるのか、これが対になった用語であることを示すために、ここではあえて英語で表記することにする。

dissociation はユングにとって、心の統合性を脅かす心理機制であり、これに対していかに心の個人的そして元型的内容と関係をもちながら個性化を遂げるかが彼自身にとっての重要課題であった。そして、コンプレックスや元型のイメージとの対話の重要性を強調した。この対話を association と表現することもできよう。association について Rock (2004) は以下のようにうまく記している。「現在の体験でモザイクの断片の1つが呼びさまされると、相互に連結したニューロンが次々に発火し、記憶の全体がよみがえる。作家マルセル・ブルーストは不朽の名作『失われた時を求めて』でこのプロセスを美しく描写している。主人公が紅茶に浸したマドレーヌを口にして、ふいにこの上ない幸福感に包まれるシーンだ。紅茶に浸したマドレーヌの味が、子供の頃日曜の朝に大好きな叔母さんを訪ねたときの強烈な喜びを思い出させる。」この例に示されているように association は情動を喚起し、かつ豊かな感情生活への可能性をもたらすものである。一方、dissociation については Kalsched (1996) が「セルフケアシステム self-care system」の悪魔的 diabolical な働きとして記述している。それは「保護者・迫害者 protector/persecutor」という二重の意味をもつ、つまり切断し抹殺する代わりに安全を保つという働きをするのである。悪魔的な解体する機制は意味をつなぐ

symbolical なつながりを損なう。さらに Kalsched (2013) では dis- という接頭辞をもとにさらに考察を深めている。

こうした association と dissociation の観点をもとに、夢素材を臨床的に妥当なものにするための仮説を記してみよう。夢を情動体験を中心とした自動的な活性化システムと考えると (Hobson 2002)、それをいかに意識と結びつけるかが重要となろう。時に言葉に置き換え、他者と共有することも重要となる。確かに、夢そのものが体験の浄化作用をもち、夢見がセラピーであるという仮説もありえる。Bion の  $\alpha$  機能の考案は当を得たものであろう。(Lopez-Corvo R E, 2005) 夢見により、セラピーとは関わりなく癒されることも十分ありえるが、情動を含んだ心的内容の何とつながりまた離れるかは大きく同伴者であるセラピストの影響を受けると思われる。それは、例えば Sullivan の発達論 (Chapman, 1978) に見られるような母子関係による自己の形成への影響と同じである。同じ資格をもつセラピストであっても、セラピストがどのような人間であるかが重要であるというのは、このことをさすと思われる。

さらに夢を拡充するための視点も問題とすべきであろう。例えば、自己心理学では夢を「自己状態」(self-state) を示すものと想定している。(Ornstein, 1987) 夢が体験の再構成と関係するならば、夢の体験を情動を中心とした自己状態の現れとしてとらえ、覚醒した自己状態との association を問題とすべきであろう。夢からすると精神分析で中心とされる転移にまつわる情動は体験の一部であるはずで、転移に帰結させることは体験の歪曲となることもあると思われる。

いずれにしても、情動体験の源泉としての夢やイメージと覚醒した意識・言語を介する理解との弁証法的対話が重要と考えられる。こうした視点を神経科学との接点を意識しながらとらえ直してみたい。

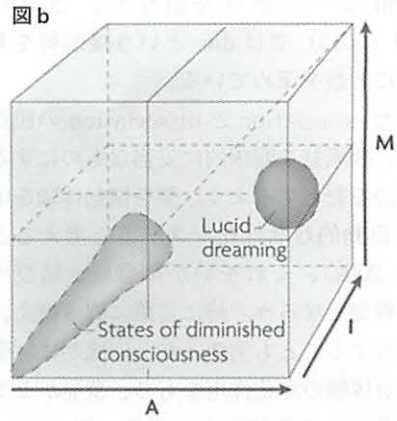
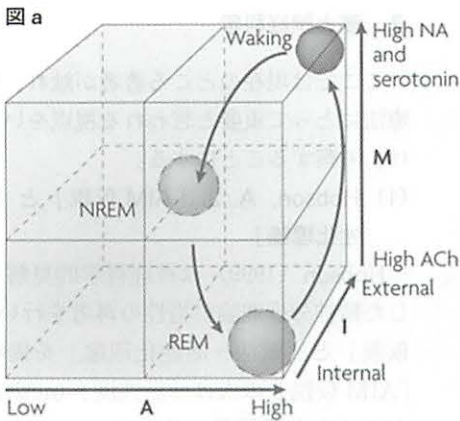
### 3. 夢と神経科学

ここでは現在のところ著者が触れ、夢の心理療法にとって重要と思われる視点をいくつかあげ、考察することにする。

#### (1) Hobson, A. J. 「AIM 仮説」と「賦活-活性化理論」

Hobson (1999) は神経科学的見解を足場とした精神分析理論妥当性の再考を行い、「AIM 仮説」と「賦活-活性化理論」を提唱した。「AIM 仮説」の A は「活性化」(activation)、I は「入力情報源」(input-output gating)、M は「制御モード」(modulating) を意味する。REM 睡眠では脳は部分的に活性化し、アミン系神経よりコリン系神経が優勢となり、かつ外的刺激は遮断されている。時空間を認識する前頭前野の活動は停止し、Jung の言うような「短い狂気」を喚起することになる。Hobson の AIM 仮説について nature (<http://www.nature.com/>) に示されている図をあげておく。図 a は覚醒状態から Non-REM、そして REM への状態変化を 3 つの次元から示したものである。この図からすると、深さという 1 つの次元から睡眠は理解できず、それぞれが異なった状態と考えられる。図 b は明晰夢と混迷の状態を示したもので、あきらかに睡眠状態とは異なったものと理解できる。

Hobson の仮説を敷衍すれば、REM 期は脳内で情動を整理し、新規の経験を時空のタグのついた新たな記憶システムに置き換える役割を果たすといえよう。夢が情動の再構成に関わるという仮説は、夢のほとんどが情動とくに不安や恐怖を中心としたエピソード記憶を彷彿とさせるものが多く、単に文字や計算を覚える意味記憶に関わるだけのものは出現しないことから推察される。そうした情動にあふれた経験的世界を状態の変化を前提として、再体験することは、経験の再構成に大きな役割を果たすと思われる。



Nature Reviews | Neuroscience

## (2) REM 睡眠と夢

1953年に Aserinsky と Kleitman が偶然の幸運によって REM 睡眠を発見して夢見との関連が研究されてきた。ここでは、Rock (2004) に従い、その意味についての仮説をいくつか取り上げてみる。Winson (1985) によれば、獲物獲得や捕食者に警戒する時には海馬が規則正しく発火する。θ波がその時と同じように出現するのは REM 睡眠においてだけだという。また、Braun (2003) によれば、REM 睡眠時には作業記憶を司る脳部位は働いておらず、夢が覚醒すると思いがたいことは説明される。ところが、長期記憶の形成と引き出しに関わる脳部位は覚醒時よりも活発に働いている。こうしたことから、夢見は、REM 睡眠中の生存に関わるメンタルリハーサルの役割を果たしているのではないかと考えられる。日中の体験が再出現する可能性に備えて、睡眠中にニューロンの再接合 (rewiring) が行われる可能性とも言えよう。(Bar-Yam 1993) しかし、夢見は恐怖や不安に関するものばかりとは限らず、その他の情動、とりわけポジティブな感情を伴うこともあり、将来への肯定的な可能性を含めた広く経験の再構成にも関わっていると考えるのもいいのではないだろうか。

## (3) ト라우マ体験と反復夢

アミン作動系神経の働きが弱まり、コリン作動系神経の活動が優勢になる中で、時空間に関わる現実吟味が低下し、夢はいわば短い狂気の様相を帯びる。そして、反復夢を見続ける群は、反復夢を見ない群よりも不安が高く、葛藤に色取られた夢を見る傾向にあるという。(Zadra, 1996) また、前田・土生川 (2006) の報告によれば、トラウマ後の睡眠状態では、NREM に入れず、REM と覚醒を繰り返すことがある。そして、次のように美しくまとめている。「夢は、前頭皮質レベルでの現実吟味や外界刺激の影響をあまり受けることなく、自由に多くの記憶塊を取り出し、整理統合しているようなものだろう。それは、静かで誰にも邪魔されることのない部屋で、ごちゃごちゃした家具の整理や模様替えをしているようなものでもある。もちろん PTSD 例でも、そのような夢作業はある。ただ外傷性記憶だけは、めったに動かしてはならない、あるいは動かすことのできない霊廟のようなものかも知れない。」本来 REM 睡眠時には、長期記憶の再構成が行われるはずであるが、いわゆるあまりにも浅い眠りにおいては情動体験を統合して前頭葉皮質に長期記憶としてとどめるに至らない可能性が考えられる。いわば、下からの「カプセルに入れら

れた経験」(Kalsched 1996)が扁桃体を刺激し続けはするが、時間や空間のタグをつけておさまりをつけることができず、反復されるのであろう。夢からの連想については、中性的な記憶を語る時は左脳が働き、トラウマ記憶に触れると右脳が活性化すると報告がある。(Shiffer et al. 1995)もし、左脳による言葉での語りと経験との間に解離があるなら、そこには統合性が認められず、それらしい語りと生ものとしての情動の炸裂との行き来が了解されることなく併存する可能性がある。そうした場合、単にエクスポージャーによって情動体験にさらすよりも、明示的記憶と暗示的記憶の両側面を考慮した上で、経験の表出を促し、かつ体験としてつなぎとめていく必要がある。例えば、箱庭療法や絵画療法を行いながら、そこでの連想や想像を他者と共有することが情動性を司る右脳と言語を取り仕切る左脳との連携を促すことになるのではないだろうか。

#### 4. ユング派の強調点と神経科学の接点

##### (1) Margaret Wilkinson

第4世代ユングンの中には神経科学に注意を払うものも多いと思われるが、文献として辿るとすると、現在のところ最もまとまりのある成書を出している分析家として Margaret Wilkinson があげられる。英国の SAP (Society of Analytical Psychology) のメンバーとして実践に取り組む彼女は、現代神経科学やトラウマ理論、アタッチメント理論についての知見を精力的に心理療法に取り入れようとしている。主要書である *Coming into Mind: The Mind-Brain Relationship* (2006) と *Changing Minds in Therapy: Emotion, Attachment, Trauma, and Neurobiology* (2011) の他に、神経科学の知見を取り入れた論述がある。(例えば、Wilkinson, 2003) 今後、学びを進め紹介もしていきたいが、ここでは、臨床的に重要な観点として、神経科学を視

野に入れた技法の再考を踏まえ、暗示的記憶と明示的記憶、次に関係論とのかかわりについて触れておきたい。

##### (2) 暗示的記憶 (implicit memory) と明示的記憶 (explicit memory)

精神分析の伝統的な技法である言語による解釈とその理解に対して、暗示的記憶と明示的記憶という概念は大きなチャレンジをなげかける。我々は全てを意識し統制することはできず、むしろ無意識的内容への信頼とでも呼ぶべきものに乗っかって生きているのであろう。例えば、内的作業モデルは常に意識されているものではないが、常に人生に彩りを与えている。Wilkinson (2011) は Ginot (2007) を引用し、次のように述べている。「セラピストは以前にも増して「治療的な変化を引き起こすには、内容の明確化、言語による解釈、単なる記憶の想起では不十分であること」に気づきはじめ、こころの変化に必要なのは「無意識的な情動の相互作用をもとにした変容の力」であると考えるようになっていく。」ここで強調されている相互作用とは、クライアントのみならず、セラピスト側の意識と無意識の弾力的な相互作用である。この観点は、ユング派における古典的な「傷ついた癒し手」(wounded-healer, Groesbeck 1975) の概念を彷彿とさせる。

Wilkinson (2011) は次のようにも述べている。「また Mundo (2006) が Kandel を引用して述べるところによれば、脳への心理療法の影響は、暗示的な一連の変化 (implicit processes) に関わる領域で「つまり、新皮質、扁桃体、及び、小脳において」、見出されるであろう。また、力動的な心理療法のプロセスが遺伝子発現、シナプス可塑性や、特定の部位における脳代謝に影響を与えうる」と述べている。こうした変化を実証的・科学的に示すには時期尚早であるが、今後心理療法における変化をより精緻なイメージング技法によって測定することも必要であろう。

ともあれ、明示的体験と暗示的体験、右脳と

左脳、the bottom up と the top down といった背反性を解離や分割を用いて切り離すのではなく、その弾力的な統合性獲得が重要と考えられる。こうした心理的機能は、脳梁 (Panksepp 2008) や小脳 (Levin 2009) の機能性によるという見解がある。

片方の極に「箱庭をしていたら何も言わないでも何が起きているかもわからないけどよくなった」もう一方の極に「転移解釈を与え続けると理解され受け入れられ変容した」という例があてはまるのではないか。いずれも絶対化するのではなく、人間の機能的側面の1つと考えた方がよさそうである。

臨床場面では、「言語でストーリーを語りつつ情動を体験することで、情動と認知の統合的な構成がなされる。」(Cozolino 2006) というアプローチが有効と思われる。こうした観点について、Wilkinson (2011) はセラピーの過程を次の2つに分けている。

第一段階 組織化されていない皮質下で起こる不安や怒りにとらわれた扁桃体に突き動かされた状態を認識すること。

第二段階 暗示的・象徴的なイメージを言葉と結びつけること。

エナクトメントやメタファーによって表現されている脳幹-大脳辺縁系-右脳経路の非言語的経験を、左脳の関与により言語でつなぎとめる作業と考えられる。例えば、臨床場面において「傷口に塩を塗りつけてくる」という表現により痛みがより鮮明に浮かび上がることもあれば、言葉だけが先行し体験をつなぎとめていないと感じる場合もあろう。association の働きによって出来事が体験として言葉化されるか、dissociation により体験が層構造になりつながらないかという問題である。いわゆる「頭だけ」の問題は、心理療法家の訓練課程でもより問題とされるべきであろう。

### (3) 関係論とのかかわりから

暗示的な心の領域と明示的な心の相互的・統合的な関係が重要であるとして、それでは次に

心理療法におけるセラピストの役割をどう考えればよいのだろうか。心理療法が人為的・契約的な関係であるにしろ、他の関係に優って定期的に、頻繁に、そして情動に触れるように設定されていることは間違いない。転移を素材としてその解釈を技法として位置づけようと位置づけまいと、深い情動的関与の可能性が布置される。このセラピーにおける関係と神経科学的知見との照合を行うにも、早期母子関係の発達理論に学ぶところは大きい。

Shore (2003) によれば、子どもは母親との直接的な交流を通して、母の情動調律的な右脳の作用を自らの右脳の雛形として取り入れる。左脳の言語的理解に先んじて、情動調整のあり方がある程度決定されるわけである。養育者から虐待を受けた子どもでは、エンドルフィンのレベルが高いという報告がある。これは外傷の際の感覚遮断と同じ心理メカニズムをもたらすことになる、いわば dissociation が「うまく」働く可能性を準備することになるのである。セラピーにおいて問題となるのは、調律する側の自己状態、つまりセラピーにおいてはセラピストの自己状態なのであろう。夢を素材としてセラピーを進めていた場合に、隠された情動の状態がシンボリックな表現を借りて夢として出現することがありえる。夢はユングが前提としたようにそのものとしてまずは右脳で情動体験として味わうことが大切なのであろう。「解釈よりも共主観的關係における肯定的な情動の側面の方が、暗示記憶の問題を抱えた患者には有効なようである。」と Wilkinson は指摘している。時に、セラピストが本当にそう感じるなら「あなたは私のことが信じられないでしょうけど、苦しみが少なくなるように協力したい気持ちとはとても強いです。」といった自己開示も有効かと思われる。また、セラピー場面における沈黙が時に暗示的記憶を活性化するあいまいな刺激となるという指摘もある。(Cozolino 2002) また、明示的にとらえられる範囲で過去の体験や現在の状況、あるいは未来の予測も踏



まえ、夢とパラレルな素材について情動を関与させながら思い巡らせることが大切であると思われる。さらに神経ネットワークの再編を問題にすれば、時にひらめき、日常ではえられない認識、post-traumatic growthにつながるストーリーも rewiring の中で浮かび上がる可能性はあるのだろう。

また、関係トラウマを主としない症例においても、神経科学的知見によるセラピストの技法選択再考が求められよう。言語による解釈では暗示的記憶には届かないと判断された場合、セラピストの伝達するのは言葉の意味ではなく声の調子や顔の表情、雰囲気である可能性がある。ひょっとすると、自由連想のためのカウチの心地よさとセラピストの受容が決定的な要素となっていることもあろう。あるいは思考のコントロールでは届かない手続き的記憶への働きかけには行動療法的アプローチが必要であるという判断もありえる。また、アタッチメントの障害では、緊密な情動調律の関係によって暗示的・明示的両側面における対象関係がセラピストとの間で体験され、新たな般化可能な神経ネットワークが形成されるのであろう。また、Shore (2007) の強調する永続的变化のみならず、その限界を踏まえつつ認知の治療的要素を問題にすることもありえるだろう。(例えば、Pally, 2007) 「その時、あなたは（相手は）どう感じていたんでしょう？」「他の可能性はないでしょうか？」そうしたアプローチはメンタライゼーションの観点の有効性に依拠したものと考えられる。

## 5. 臨床素材へむけて

以上述べてきたように、本稿では、夢が時空間の束縛を解き放たれた情動にまつわる心の状態を示しており、情動の再構成と関わっているという仮説に立脚している。本稿では、神経科学的知見を事例と照合するための前提について記した。その2事例編では、こうした観点に基

づいて事例について考察してみる。やがて、臨床場面での脳機能をとらえる近赤外分光分析法 (fNIRS: functional near-infrared spectroscopy)」や光トポグラフィのような脳機能イメージング技法を用いて、夢をセラピーで扱ったり、箱庭をおいたり、アクティブ・イメージーションをしている時に脳はどのような働きをしているのか、右脳と左脳、前頭前皮質や辺縁系の働きはどうかを、より高い精度で調べられる時が来るかも知れない。

## 文 献

- Bar-Yam Y (1993): Sleep as temporary brain dissociation. NECSI Research Report YB-0005. Available at necsi.org.
- Bromberg P M (2011): The Shadow of the Tsunami: and the Growth of the Relational Mind. Routledge 吾妻壮・岸本寛史・山愛美訳 (2014): 関係するところ—外傷、癒し、成長の交わるところ 誠信書房
- Braun R N (2003): New Neuropsychology of Sleep. Commentary.
- Carter R (2010): Mapping the Mind. University of California Press 養老孟司訳 (2012): ビジュアル版 新・脳と心の地形図 原書房
- Chapman A H (1978): The Treatment Techniques of Harry Stack Sullivan. Brunner/Mazel 作田勉訳 (1979): サリヴァン治療技法入門 星和書店
- Cozolino L (2002): The neuroscience of psychotherapy: Building and rebuilding the human brain. London & New York: Norton.
- Cozolino L (2006): The neuroscience of human relationships: Attachment and the developing brain. London & New York: Norton.
- 藤井直敬 (2009): つながる脳 NTT 出版

- Fordham M (1988): Children As Individuals. Free Assn Books
- Groesbeck J (1975): The Archetypal Image of The Wounded Healer. Analytical Psychology 20 p122-145
- Ginot E (2007): Intersubjectivity and neuroscience: Understanding enactments and their therapeutic significance within emerging paradigms. Psychoanalytic Psychology, 24(2), 317-332.
- 広瀬 隆 (2006): クラシカル・ユングに對する素朴な疑問—トラウマと個性化の停滞との関連から見た夢の理解— 帝塚山学院大学 人間文化学部研究年報
- Hobson A J (1999): Dreaming as Delirium: How the Brain Goes Out of Its Mind. 池谷 裕二監訳 (2007): 夢に迷う脳 朝日出版社
- Hobson A J (2002): Hobson J. A (2002): Dreaming: A Very Short Introduction. Oxford University Press. 冬木 純子訳 (2003): 夢の科学—そのとき脳は何をしているのか? 講談社
- Jacoby, M. (1984): Analytic Encounter: Transference and Human Relationship. Inner City Books 氏原寛訳 (1985): 分析的 人間関係—転移と逆転移 創元社
- Jacoby M (1985): Individuation and Narcissism: The Psychology of Self in Jung and Kohut. Routledge 山中康裕・高石浩一訳 (1997): 個性化とナルシズム—ユングとコフートの自己の心理学. 創元社
- Kalsched D (1996) : The Inner World of Trauma: Archetypal Defences of the Personal Spirit. Routledge 豊田・高田・千野訳 (2005): ト라우マの内なる世界—セルフケア防衛のはたらきと臨床 新曜社
- Kalsched D (2013): Trauma and the Soul: A psycho-spiritual approach to human development and its interruption Routledge
- 河合隼雄 (1966):ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄 (1992): 心理療法序説 岩波書店
- 北山修 (1988): 心の消化と排出 創元社
- Levin F M (2009): Emotion and the psychodynamics of the cerebellum: A neuro-psychoanalytic analysis and synthesis. Karnac.
- Lopez-Corvo R E (2005): The Dictionary of the Work of W R Bion. Karnac
- 前田・土生川 (2006): PTSDと悪夢-夢の「エピソード記憶化」現象について こころの科学 129
- Mundo E (2006): Neurobiology of dynamic psychotherapy: An integration possible? Journal of the American Academy of Psychoanalysis and Dynamic Psychiatry, 34(4), 679-691.
- 岡野憲一郎 (2006): 脳科学と心の臨床—心理療法家・カウンセラーのために 岩崎学術出版社
- 岡野憲一郎 (2013): 脳から見える心—臨床心理に生かす脳科学 岩崎学術出版社
- Ornstein P H (1987): On Self-State Dreams in the Psychoanalytic Treatment Process.
- Rothstein A (1987): The Interpretations of Dreams in Clinical Work. International University Press.
- Pally R (2007): The predicting brain, unconscious repetition, conscious reflection and therapeutic change. International Journal of Psychoanalysis, 8, 861-8 81.
- Panksepp J (2008): The power of the word may reside in the power of affect. Integrative Psychological Behavioral Science, 42, 47-55.
- Rock A (2004): The Mind At Night: The New Science Of How And Why We Dream. 伊藤和子(訳) (2006): 脳は眠らない 夢を生みだす脳のしくみ ランダムハウス 講談社
- Schiffer F, Teicher M H, & Papani-Colaou A C (1995): Evoked potential evidence for

- right-brain activity during recall of traumatic memories. *Journal of Neuropsychiatry and Clinical Neuroscience*, 7, 169-175
- Schore A N (2003): Affect regulation and the repair of the self. Norton
- Schore A N (2007): Psychoanalytic research, progress, and process: Developmental affective neuroscience and clinical practice. *Psychologist-Psychoanalyst*, 27(3), 6-15.
- Stein M, Jacoby M (2008): AJC Series 4 Transference, The Therapeutic Relationship and Transformation in Therapy. ISAP ZURICH
- Stein M (2011): AJC Series 17 An Introduction to Jungian Psychotherapy for Patients and Therapists. ISAPZURICH
- van der Kolk, B.A. (2006): *Clinical Implications of Neuroscience Research in PTSD*. New York Academy of Science
- Wilkinson M (2003): *Undoing Trauma, Contemporary Neuroscience*. *Journal of Analytical Psychology* 48 p235-253
- Wilkinson M (2006): *Coming into Mind: The Mind-Brain Relationship: A Jungian Clinical Perspective*. Routledge
- Wilkinson M (2011): *Changing Minds in Therapy: Emotion, Attachment, Trauma, and Neurobiology*, W W Norton & Co Inc
- Winson M (1985): *Brain and Psyche*. Anchor Press
- Zadra A L (1996): *Recurrent Dreams*. Berrett D (1996) et al. (1996): *Trauma and Dreams*. Harvard